

田中洋子編著『エッセンシャルワーカー

——社会に不可欠な仕事なのに、なぜ安く使われるのか』旬報社（2023年）

コロナ下で注目を浴びた「エッセンシャルワーカー」。スーパーマーケットの従業員にしても、トラックの運転手にしても、普段あまり意識されず脚光を浴びることも少ないが、その働きなしに私たちの生活は維持できない。社会の機能維持に欠かせない仕事に携わる人たちの処遇は（とりわけ日本においては）低く、また、ここ30年間で低下を続けてきた。

不可欠な仕事をする人が軽んじられるという、デヴィッド・グレーバーが『ブルシット・ジョブ』で「倒錯した関係」と呼んだこの矛盾はどこから来ているのか、それを「正常」に戻すには何が必要なのか。

本書はこの課題に答えるために、多種多様な「現場」を取り上げ、その実態を明らかにし、歴史的変遷を跡づけ、改革への方策を探っていく。さまざまな領域で自由化・市場化と、正規/非正規の二元化・格差拡大が進んだことで、それらの現場で働く人々の処遇が低下したと編著者は言う。他方で、「2024年問題」に直面する運送・建設などの業界をはじめとして、深刻化する状況を打開するための様々な動きが始まっていることも取り上げ、目指すべき改革の方向性を示そうとしている。

インタビュー記録を随所に挟み、現場の声を拾い上げていることは、本書の優れた特徴の一つである。日常生活に関わりがあるが故に知った気になっている事柄は多いからこそ、仕事の現場を語る当事者の声からは、“大人の社会見学”のような感興を超えて、労苦と処遇の不均衡が実感を伴って迫ってくる。

加えて、小売・外食と看護・介護については、ドイツの実態が紹介されており、日本の現状を改善する方策を考える際に参照されている。小売・外食における（労働時間の多寡によらない）同一単価の給与表適用も、看護職・介護職の魅力アップのための賃金引き上げと労働時間適正化も、日本の現状との距離は大きいと感じる一方で、ドイツで実現できることは日本でも可能だと思わせられる。

目次を一見して、小売・外食、公共サービスにおける保育園・学校・ごみ収集・自治体の相談支援業務、看護・介護、運送・建設などと並んでアニメーション制作の現場が取り上げられていることに興味を覚えた。本書にも、2020年春のドイツ文化相による「文化は必要不可欠なものである」との発言が引かれているが、コロナ下において日本を含む各国で芸術・文化分野への支援策が実行された。その意味で、アニメーターもまたエッセンシャルワーカーと言えるが、それだけでなく、アニメーション制作の現場では、運送業・建設業等と同様の多重下請け構造のもと、同じく自由化・市場化の流れの中で不安定化と処遇低下が進んだこともまた、本書で取り上げられた理由である。

1990年代以降の日本社会の変化を、編著者は「現場で働く人にお金を回さない仕組みの普及」と総括している。その結果「頭でっかちで手足を痩せ細らせた社会」になったのだ、と。＜市場＞を原理とする経済は、＜外部＞を蚕食することで拡大していく。めぼしい＜外部＞が消失した後にそのターゲットになったのが「現場」で働く人たちだったと言えるのではないか。

さまざまな現場で働く人たちが感じている「理不尽」から出発してそれが生み出された経緯をたどり、そこから未来への希望を見出そうとする本書には、働くことの意味や、目指すべき社会の構想にまでつながる視点の高さがある。（湯浅 論）